

NPO法人 自立支援事業所 サンレジデンス

SUN通信 第2号

2015. 9. 25 発行

NPO法人 自立支援事業所
サンレジデンス

〒011-0023

札幌市北区北23条西5丁目

1-18 Dio23ビル3F

TEL 011-746-8889

FAX 011-299-3107

サンレジデンスの創設者 米塚顧問を偲んで

平成27年6月12日、サンレジデンスの事業を立ち上げた米塚俊夫顧問の一周忌にあたるこの日、(株)アパートナーより照井会長、栗田社長にもご参加いただき、午前「サンレジデンス第2回パークゴルフ大会」を、そして夜にはホテルの会場をお借りし、「米塚顧問



メモリアル懇親会」を開催しました。雲ひとつない快晴の中行われたパークゴルフ大会では、入居者のみなさんをはじめ、前回大会を大きく上回る参加者が集まり、健康的に楽しく、笑顔の絶えない大会となりました。入居者とスタッフ、またお世話になっているアパートナー札幌支店の職員の方々とレクリエーションとして昨年

から始めた大会ですが、中にはあまりにも真剣になりすぎ、「今回は真面目に勝

サンレジデンスキャップを被り記念撮影



ちに行く」と言い出すスタッフが出てくる始末で、思いもよらず異様な盛り上がりを見せました。米塚顧問がご健在で、このような場に一緒にいてくれたらとしんみり思うこともあります。前回も今回も本当によい天気にも恵まれたのは、きっと米塚顧問もどこかで見てくれているからと思いつくことにして、今後もっと多くの人が参加してくれる大会にしていきたいと考えています。

ナイスショットと思いきや・・・

同日午後6:30より、札幌サンプラザの会場で開かれた「米塚俊夫顧問メモリアル懇親会」には、パークゴルフ大会の参加者全員のほかに、米塚顧問の御子息、サンレジデンスといつも連携してくださっている、他NPO

〇団体の職員の方々にもご参列いただきました。照井代表理事の進行によって始まった懇親会は、米塚顧問との思い出はもちろんのこと、サンレジデンス立ち上げ当時の苦労話や、現在までの活動の中で生まれた成功例や失敗例、今後の支援の方向性等、参加者それぞれが思い思いに語り合い、実に有意義な時間が過ぎて行きました。

生活困窮者支援を行う民間の団体が全国にはたくさんありますが、多くの団体が活動資金の確保に苦勞しています。現実的な問題として、支援活動そのものよりも、国からの補助金や助成金の確保自体が活動の中心になってしまっている団体も少なくありません。そんな中、そういったものに頼るのではなく、株式会社アパートナーという企業の体力の中から、特定非営利活動法人としてサンレジデンスが生まれた事は、社会貢献という観点、また事業の継続性という観点からも、間違いなく大きな意味があります。

そして、米塚顧問が残してきた功績を振り返ると共に、その意思を引き継ぎ、さらに精度の高い支援にすべく活動していかなければならないと、強く思わせるものとなりました。



米塚顧問メモリアル懇親会の様子

相談者が入居に至るまでの現状と課題

当事者からの相談を受けるとき、受け入れ側にとってとても大事なことがひとつあります。これはサンレジデンスだけでなく他の支援団体にも言えることですが、様々な問題を抱える当事者に対して、私達が出来ることとは何か、どこまでやれるのか、逆に出来ないことは何か、つまり、自分達（受け入れる側）の能力（実力、体力）を明確にした上で支援を開始しなければならないということです。支援団体の中には、どんな問題があっても相談に来た全ての人を受け入れると明言する所もあります。確かに聞こえはいいですが、これは明らかに思い上がりであり、インチキです。もし本当にそんなことをしているとしたら、それは俗に言う「囲い屋」です。

重度の障害がある人を介護しながら生活の面倒をみることは私達には無理ですし、薬物中毒で何度も問題を起こしている人を、薬物から抜け出させる専門知識もありません。ですから、残念ながら私達では受け入れることが出来ない人がいても当然と考えるべきです。何故なら、私達の能力の範疇に納まらない人を入居させてしまった場合、一番かわいそうなのは当事者本人であり、その本人の今の状態をさらに悪化させる可能性が大きいからで

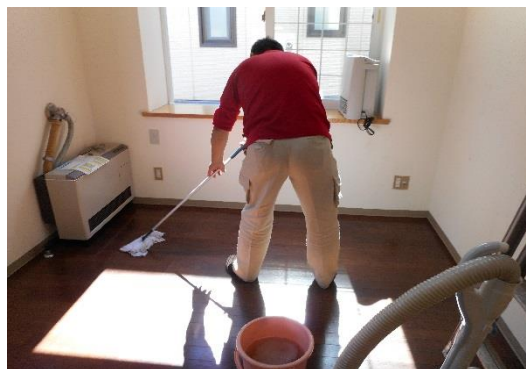
す。

それでも、私達には無理でも、相談に来た人を何とかしてあげたいという気持ちは、スタッフ全員が持っています。そこで重要になってくるのが他団体との連携です。支援団体にはそれぞれ「得意分野」があります。例えば、知的・精神障害で苦しんでいる人達の支援を専門に行っている所があれば、引きこもり等で地域社会に馴染むことの出来ない人達の生活改善支援を行っている所、また女性困窮者を対象とした支援団体もあります。こうした他団体との連携を強化することで、当事者の問題をサンレジデンスの中だけで考えるのではなく、もっと大きな視野で捉えていくことが今後さらに必要になってくるでしょう。

サンレジデンスの入居者の中に、こんな方がいます。Aさんは本州の大手建設会社で30年以上勤めていましたが、体調不良で仕事が出来なくなり退職、退職金やアルバイト等で何とか生活していましたが、やはり体調が思わしくなく、実家のある北海道に帰ることにしました。しかし実家に行くと年老いた母親も生活に困窮しており、一緒に生活することは不可能でした。Aさんは数日間路上生活をしましたが、もともと体力の落ちている身体には過酷なものでした。そこでようやく役所に相談に行き、私達と繋がりました。生活保護の申請を行い病院に行くと、心臓の機能が低下していて、もう少し遅かったら命に関わっていたかもしれないと医者に言われました。それでもようやく自分の居場所を見つけたAさんは、現在も通院治療中ですが、毎日明るい笑顔を見せてくれています。

この方のように、様々な理由で仕事や住む場所を失い、途方に暮れている人が世の中に溢れています。何とか現状から脱するために、働いてやりなおしたいが履歴書に書くべき住所がないという人はどうすればいいのでしょうか。

サンレジデンスが行うべき支援とは何かと聞かれることがあります。それは、本気でもう一度自立生活を送りたい、地域社会の一員としてやり直したいがどうすることも出来ないという人達に、それが出来るだけの『環境を整えること』に他ならないと思うのです。(株)アパートナーと協働して活動している私達には、他の支援団体にはない大きな強みがあります。それは、当事者の自立への意思を確認した上で、すぐにでも住む場所を提供できるということです。もちろん、サンレジデンスは一棟集中型の施設に入居者を集めるというものではなく、札幌市内各地にあるごく普通のアパートに入居してもらうわけですから、入居にあたっての条件や生活ルール等を説明し、私達と当事者がお互いに納得した上で入居してもらうことは言うまでもありません。当事者が切実に困っていた「帰る場所がない」という問題をい



自立に向けて懸命に仕事に励む入居者

ち早く解決して安心してもらい、当事者の能力やニーズに沿い、それぞれのペースで自立へのプランを考えていく、極端な言い方かも知れませんが、私達が行なうべき（行える）支援とは、これに尽きると思っています。この活動を続けてきた上で確信を持って言えるのは、再度自立生活に戻るための最大の力は、あくまでも本人の意思の強さです。何とかやり直したいが、その為の努力をする場所がないという人に、その努力が出来る『場所作り』をすることこそ、サンレジデンスの役割ではないでしょうか。

アパートナーPR号、札幌の町を疾走中

今年4月と5月に、(株)アパートナーより、合計3台の車両を購入していただきました。私達スタッフにとって、今年最も嬉しかった出来事でした。なにしろ、それまでサンレジデンスで使用していた車両は、エアコンをつけると途端にスピードが落ちてしまう車や、ちょっとした坂道でも登りきらずに途中で止まってしまう車、車検の時期が来たが車検に出すと買ったときよりも高くなるのではと思われる車ばかりで、運転していて生きた心地がしないものでした。相談者や入居者を乗せて走ることも多いのですが、そんな彼らも随



株式会社アパートナー札幌支店にて、新車両と撮影

分と不安そうな顔をしていたものです。しかし今では、おかげさまで安心・快適、大いに支援活動が行いやすくなりました。今まで以上に安全運転を心がけ、大切に使用させていただきます。スタッフ一同、心より感謝申し上げます。本当に有難うございました。

札幌市内はもちろん、遠方への支援活動も出来るようになり、先日は函館近郊にある森町からSOSを訴えてきた相談者を現地まで迎えに行ってきました。今までの車両で

は考えることさえ出来なかったことです。そして、新車両のボディにはしっかりとアパートナーのロゴが入っています。毎日、札幌市内各地を走り回るこの新車両は、アパートナーをPRすると共に、NPO法人サンレジデンスと株式会社アパートナーは、タッグを組んで事業活動をしているということの象徴でもあります。

これからの北海道は日を追うごとに空気が冷たくなり、また寒い冬がやってきます。長くて厳しい冬に、路上で生活しなければならない人がいていい訳がありません。そんな人が一人でも少なくなるよう、サンレジデンスは今後も活動を続けます。

NPO法人 自立支援事業所 サンレジデンス
松下 和広